

保育における季節性と連動した幼児の仲間関係および 対人理解の変容

—運動会に関する実践報告に着目して—

(中間報告)

北海道大学大学院教育学院 及 川 智 博

The Development of Peer Relationship and Interpersonal Understanding Related with the Seasonality: Focusing on the Practice Report about the Athletic Meet in a Japanese Kindergarten.

Graduate School of Education, Hokkaido University, OIKAWA, Tomohiro

要 約

本稿は、運動会に関する幼児教育の実践報告と、幼児期の対人理解および仲間関係に関する先行研究の関連について、以下の3点を整理し、今後の展望を示すものである。1つに、心の理論に関する先行研究を概観し、幼児期における多様な対人理解の発達プロセスが、幼稚園の文脈的な背景や、友だちとの仲間関係の変容プロセスと、不可分な関係性にあることを確認した。2つに、仲間関係に関する先行研究を概観し、日本に土着的な仲間関係の変容プロセスを議論するための視点が弱いことを指摘した。この指摘をうけて、3つに、運動会に注目することで、わが国の季節性をもつ保育のリズムに呼応した仲間関係の変容、およびそれと連動した幼児の対人理解の変容の一端を見出すことの可能性について議論した。

【キー・ワード】 幼児, 仲間関係, 対人理解, 運動会, 季節性

Abstract

This study aimed to discuss the relationships between the practice report about the Japanese athletic meet and previous studies in theory of mind and peer relationships. For this objective achievement, this study indicated three main points. First, we couldn't discuss the developmental process about interpersonal understanding separate from changes of the context of early child setting and peer relationship. Second, previous studies didn't have the viewpoint to examine the specific developmental process of peer relationship in Japanese kindergarten. Thirdly, by paying attention to athletic meets, we could examine the developmental process about children's peer relationship and interpersonal understanding that runs parallel with seasonal process about early child education in Japanese kindergarten.

【Key words】 Preschooler, Peer relationship, Interpersonal understanding, Athletic meet, Seasonality

はじめに

わが国の幼児は、幼稚園のなかで、他国では類を見ないユニークな出来事を経験することがある。その 1 つが、保育文化として全国の幼稚園に広く普及している「運動会」である。これまで運動会は、実践現場において、幼児の発達の本質に変化を生む節目として認識されてきた（秋田, 2010）。

その一例として、藤井・丸島・清水（1992）の実践記録がある。そのなかでは、目が悪いほか、友だちに手を出しがちな年長児の将也に対し、他人事として冷め、衝突までしていた賢三が、運動会の後に保育者にポツリと「僕なあ、運動会のとて思ったんやけどな、将ちゃん、薄目しか見えへんけど、リレーのとて、いっしょうけんめい走ってはったんや（藤井ほか, 1992, pp.148-149）」とつぶやくなど、共感的な態度を示すようになったことを報告している。以下ではこうした、保育を通して生まれた賢三の“ささやかな”対人理解の変化が、発達心理学の研究に対していかなる示唆を包含しているかを検討していく。

幼児期における対人理解の発達：対人理解と仲間関係の不可分性

これまで、対人理解の発達を議論してきた研究群の 1 つが「心の理論」に関するものである。心の理論を測定する誤信念課題が考案されてから（Wimmer & Perner, 1983）、世界各国の幼児を対象に研究が実施されてきた。その研究をメタ分析した Wellman, Cross, & Watson（2001）は、誤信念課題の通過時期に文化差があることを指摘した。また、日本の幼児を対象に課題を実施した Naito & Koyama（2006）や東山（2007）は、日本の幼児は欧米の幼児と比べて、課題の通過時期が遅いことを報告してきた。こうした結果は、心の理論は欧米的な対人理解の一形態でしかなく（内藤, 2016）、各文化に土着的な対人理解のあり方を、人々が発達させている可能性を示唆している。特に幼児期の場合、幼児の生きる場である幼稚園の文脈による影響も大きいことだろう。

素直に考えれば、幼児が他者を理解する営みそれ自身が、脱文脈化することの困難な行為である。幼児はある社会的な状況や、周囲の人々と個々に結ぶ関係の力動のなかで、生活世界をつくり出しながら生きている（浜田, 2009）。たとえば藤井ほか（1992）において、賢三は保育のなかで、将也に対する新たな理解を見出していったものと推察される。こうした見直しが、それまでの園での生活や、賢三と将也の関係性をなくして生まれたとは考えづらい。対人理解のあり方は、当人が生きる場や、そこで積み重ねてきた関わりの歴史と、不可分な関係にあるものと推察される。この点において、誤信念課題における「他者」がどの友だちを指すか気にする幼児がいたという報告や（遠藤, 1997）、具体的な友だちの理解が架空の人物の理解よりも先行するという指摘は（近藤, 2014）、注目に値する。

ここで忘れてはならないのが、幼稚園における人間関係の継続性である。幼児は幼稚園のなかで、多くの友だちと明日も明後日も継続して関わり続ける。そのため、友だちとの相互作用の積み重ねは、

幼児の対人理解だけでなく、その友だちとの仲間関係をも形成していかざるを得ず、両プロセスは表裏一体の関係にある。ゆえに、日本の保育に根ざした対人理解の発達プロセスをボトムアップに議論する際には、それと同時に、幼稚園に根ざした仲間関係の変容プロセスの議論を欠くことができないと考えられる。しかし、そもそも日本の保育に特徴的な仲間関係の変容プロセスそれ自体が、これまで詳しく言及されてこなかった論点であった。

仲間関係に関する先行研究の前提：システムの多様な変化はいかにして導かれるか？

幼児期の仲間関係に関する研究は、その歴史を大きく2つの時期に区分することができる。まず90年代初期まで、先行研究は、仲間関係を形成するために必要な、社会的スキルといった個人的な能力を中心的な問題として扱ってきた（井上, 1992）。次に、90年代後半にさしかかると、無藤（1997）を契機として、幼児間の仲間関係や相互作用を、個人の能力発達によってではなく、行為の連鎖やルーティンの変化を通して発展する自己生成的なシステムとしてとらえる研究が普及してきた。

無藤（1997）の指摘を継ぐ研究の多くは、自由遊びにおける幼児間の関わりやその特徴の変化から、仲間関係の発展プロセスの解明を目指してきた（砂上, 2012）。この目的の達成へ向けて先行研究は、会話や仲間入りといった関わりの特徴変化や（高櫻, 2008; 倉持・柴坂, 1999）、保育環境や保育者の介入という外的要因の影響に注目してきた（水津・松本, 2015; 廣瀬, 2007）。そのため、先行研究は幼稚園のなかでも、自由遊びのなかでみられる幼児の姿に、研究の焦点を絞ることが多かった。

自由遊びでみられる幼児の姿に注目することは、Parten（1932）から今日まで、先行研究がひろく採用してきた方法論である。そこには、自由遊びが幼稚園で通文化的にみられ、かつ特殊な教育的活動が行われず、統制的な場面として扱えるという前提がある。この前提は、遊びのなかで交わされた相互作用の特徴を、氏家（1982）のように国際比較をしたり、倉持・柴坂（1999）のように数年や数ヶ月単位で比較したりしてきたことに現れている。

こうした前提に立つとすれば、幼稚園に内在的に、日本と他国の仲間関係の差異を生み出す背景として考えられるのは、遊びに対する保育者の直接的な介入および保育環境となる。しかし、Valsiner（2007/2013）が比較文化心理学と文化心理学の差異を指摘するように、いくつかの「日本の保育らしさ」という静的な特徴を見出すだけでは、それが仲間関係のシステムや対人理解の発達プロセスと、いかなる動的な関係を有するかを議論することは難しい。この困難に際して注目すべきは、仲間関係のシステムを包含する幼稚園それ自体が、ある動的なリズムで実践を展開している点である。

幼稚園における季節性と仲間関係と対人理解

実践に即して考えれば、幼稚園では、4月から3月の区切りのなかで様々な実践が営まれている。同じ園でも春と秋では、幼児や保育者、日々の遊びから設定保育まで、その姿が様変わりしていることさえあるだろう。こうした幼稚園の、1年にわたって保育実践そのものが質的に転換しつつ展開していく性質を、ここでは季節性とよぶ。特に1年間の実践に節目、すなわちリズムを形成し、幼児や

保育者にとっても特殊な意味合いを持つと考えられるのが「行事」である。

行事と仲間関係の連関を検討したものの1つとして、年長児のリレーごっこを追跡した及川・川田(2016)がある。その追跡では、運動会直前に、幼児は遊びのなかで関わる相手を流動化させていた時期があったことが報告されている。この流動化は、幼児は次第に遊ぶ相手を固定化していくとされた従来の見方とは(倉持・柴坂, 1999), 方向性を異にするものである。こうした日本の保育に土着的な時間の流れに沿って生まれる, 仲間関係のうごめきを背景として, 幼児は対人理解のあり方を運動的に変容させている可能性がある。

ここまで、藤井ほか(1992)の実践報告を始点として、幼児の対人理解と仲間関係の両者の発達プロセスが、季節性をもった保育実践のリズムと連動している可能性を議論してきた。この可能性を追求する皮切りとして、運動会を幼児が経験することの主観的な意味をボトムアップに再検討することのなかに、日本の保育に固有の、仲間関係および対人理解の発達プロセスの一端を見出すことができるかもしれない。

引用文献

- 秋田喜代美. (2010). 日本の保育文化(1): 運動会. *幼児の教育*, 109(10), 28-31.
- 遠藤利彦. (1997). 乳幼児期における自己と他者,そして心: 関係性,自他の理解,および心の理論の関連性を探る. *心理学評論*, 40, 57-77.
- 藤井 修・丸島千恵・清水民子. (1992). *5歳児 竹馬なんてカチンコチン: 挑んで自信をつけた子どもたち*. 東京: 旬報社.
- 浜田寿美男. (2009). 発達心理学の制度化と人間の個体化. *発達心理学研究*, 20, 20-28.4
- 廣瀬聡弥. (2007). 幼稚園の屋内と屋外における様々な遊び場所が仲間との関わりに及ぼす影響. *保育学研究*, 45, 54-63.
- 井上健治. (1992). 仲間と発達. 東 洋・繁多 進・田島信元 (編), *発達心理学ハンドブック* (pp.1048-1065). 東京: 福村出版.
- 近藤龍彰. (2014). 幼児は「他者の情動はわからない」ことがわかるのか?: 両義的状況手がかり課題を用いて. *発達心理学研究*, 25, 242-250.
- 倉持清美・柴坂寿子. (1999). クラス集団における幼児間の認識と仲間入り行動. *心理学研究*, 70, 301-309.
- 無藤 隆. (1997). *協同するからだとはことば: 幼児の相互交渉の質的分析*. 東京: 金子書房.
- 内藤美加. (2016). “心の理論”の社会文化的構成: 現象学的枠組みによる認知科学批判の視点. *発達心理学研究*, 27, 288-298.
- Naito, M., & Koyama, K. (2006). The development of false-belief understanding in Japanese children: Delay and difference?. *International Journal of Behavioral Development*, 30, 290-304.
- 及川智博・川田 学. (2016). 運動会における集団の単一焦点化と仲間関係の変容: 年長児のリレー遊びにおける流動性とその消失に注目して. *日本発達心理学会第27回大会発表論文集*, 253.

- Parten, M. B. (1932). Social participation among pre-school children. *The Journal of Abnormal & Social Psychology*, 27, 243-269.
- 水津幸恵・松本博雄. (2015). 幼児間のいざごごにおける保育者の介介入行動：気持ちを和ませる介入行動に着目して. *保育学研究*, 53, 273-283.
- 砂上史子. (2012). *幼稚園における子ども同士の同型的行動の研究*. 白梅学園大学子ども学研究科 (未刊行). 東京：白梅学園大学.
- 高櫻綾子. (2008). 遊びのなかで交わされる「ね」発話にみる3歳児の関係性. *保育学研究*, 46, 214-224.
- 東山 薫. (2007). "心の理論"の多面性の発達：Wellman & Liu 尺度と誤答の分析. *教育心理学研究*, 55, 359-369.
- 氏家達夫. (1982). 4-6歳幼児の社会的相互交渉についての研究. *北海道大学教育学部紀要*, 40, 89-103.
- Valsiner, J. (2013). *新しい文化心理学の構築：「心と社会」の中の文化* (サトウタツヤ, 監訳). 東京：新曜社. (Valsiner, J. (2007). *Culture in minds and societies: Foundations of cultural psychology*. Los Angeles: SAGE.)
- Wellman, H. M., Cross, D., & Watson, J. (2001). Meta-analysis of theory-of-mind development: The truth about false belief. *Child Development*, 72, 655-684.
- Wimmer, H., & Perner, J. (1983). Beliefs about beliefs: Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding of deception. *Cognition*, 13, 103-128.

謝 辞

本稿の執筆にあたり、北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センターの川田学准教授から、貴重な御助言を頂きました。心より御礼申し上げます。

